九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

福岡県におけるマダニ刺症の2例

宮原，道明
九州大学医療技術短期大学部

角田，浩之
九州大学農学部動物学教室

https://doi.org/10.15017/261

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 25, pp.25-28, 1998-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan
バージョン：
権利関係：

九州大学医療技術短期大学部紀要，1998，第25号，25－28
Memoirs Kyushu U. Sch. Health Sci., 1998, vol. 25, 25－28

福岡県におけるマダニ刺症の2例

宮　原　道　明（九州大学医療技術短期大学部）
角　田　浩　之（九州大学農学部動物学教室）

Two Tick-bite Cases in Fukuoka, Japan

Michiaki Miyahara and Hiroyuki Kakuda

Two tick-bite cases (6-year-old girl and 75-year-old woman) were reported in Fukuoka Prefecture. The ticks were identified as an adult female of *Haemaphysalis longicornis* and *H. flava*, respectively.

はじめに

マダニ類は節足動物門，蛛形綱，ダニ目に属する寄生動物で，哺乳類，鳥類，および爬虫類を主な宿主としている。このうち，ある種のものは偶発的にヒトに寄生することによって様々なマダニ類媒介性疾患 tick-borne diseases をもたらすことが知られている。マダニのヒトへの咬着によるマダニ刺症は，1989年の全国的な調査において516例報告されている[1]。その後，症例報告数は急激に増加し，1994年には796例に昇っている。この理由として，北海道におけるライム病および徳島・高知両県における紅斑熱の研究の進展に伴って，医師や研究者の関心が高まったことが挙げられている[2]。

著者らは先にマダニ刺症の4例，すなわちキチマダニ *Haemaphysalis flava* の2例（雌雄成虫1例と雌成虫1例），タカサゴキララマダニ *Amblyomma testudinarium* 雌成虫1例およびシュルツェマダニ *Ixodes persulcatus* 雌成虫1例について報告した[3]。このたび，フタトゲチマダニ *H. longicornis* とキチマダニ *H. flava* の人体寄生例に遭遇したので，その概要を報告する。

症　例

症例 1

福岡県小郡市在住の6歳女児で，左前額部に腫瘤状の異物を認めたので，1992年8月18日に公立学校共済組合九州中央病院皮膚科を受診した。虫全体を含む皮膚片を切除し，10%ホルマリン液で固定した。この患児は7月末に佐賀県御手洗山へ昆虫採集に行っており，その時マダニに咬着された可能性が高い。

虫体は体長5.1mm，体幅3.6mmで，吸血により膨大化しているが飽血状態には達していなかった。また，口下片の破損は見られなかった。触肢および脚部基節の形態から，フタトゲチマダニ *Haemaphysalis longicornis* の雌成虫と同定した（図1）。

症例 2

福岡県早良区在住の75歳女性で，1997年1月8日に同区内の宮脇クリニックを受診した。マダニは背中に咬着しており，同部には直径約10mmの発赤と軽度の腫脹を認めた。なお，リンパ節に異常はなく，全身状態は良好であった。虫体をゆっくりとつまみ上げて抜去し，10%ホルマリン液で固定した。患者がマダニに咬着された時期と場所については不明である。

虫体は体長6.7mm，体幅4.4mmで，吸血途中の未飽血雌成虫であった。触肢および脚部基節の形態から，キチマダニ *Haemaphysalis flava* と同定した（図2）。

考　察

1970年から1991年まで九州・沖縄地方の住民に見出されたマダニ刺症は32例であった[3]。その後13例追加されており[4,5]，本報告の2例を含めると

47例になる。マダニ刺症報告の全国的な増加の中[2]，九州地方においても確実に増加が見受けられる。また，先に著者らが遭遇した，中華人民共和国黒竜江省への墓参時に刺咬された例[3]に見られるように，マダニ刺症の海外からの輸入例が増加していることにも留意する必要がある[6~11]。

わが国におけるマダニ刺症の主たる起因種は東日本と西日本では異なっており，北海道，関東および中部地方では主にマダニ属*Ixodes*，近畿以西ではフタトゲチマダニおよびタカサゴキララマダニとなっている[2]。これは当然のことながら，マダニ類の地理的分布の差異によるものである。したがって，ライム病の起因種であるボレリア属*Borrelia*の有毒株を保有するシュルツェマダニは[12]，九州地方においては高山地の限られた地域でしか見出されない[13]。今回報告したキチマダニは野兎病の起因菌*Francisella tularensis*の媒介に関わるマダニの1種である[14]。フタトゲチマダニが媒介す

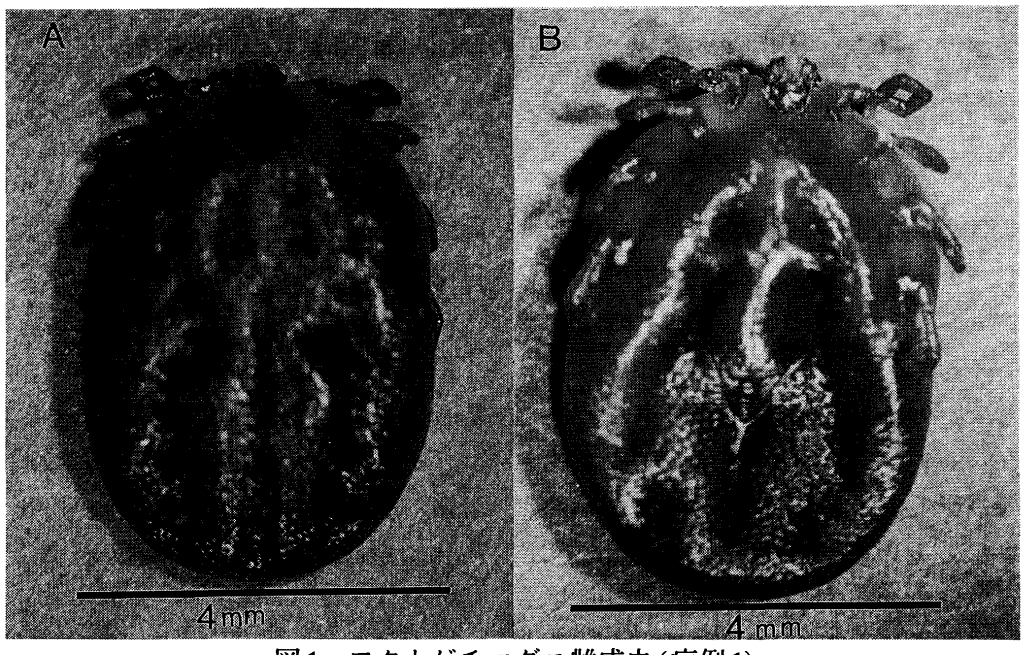

図1　フタトゲチマダニ雌成虫(症例1)
A: 背面，B: 腹面

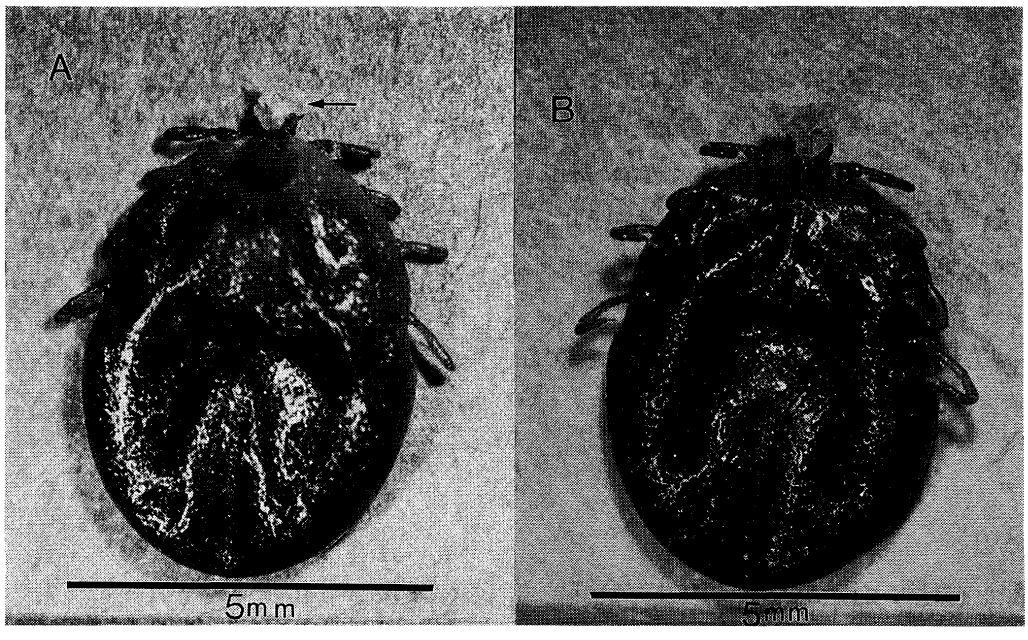

図2　キチマダニ雌成虫(症例2)
A: 背面(矢印は皮膚片)，B: 腹面

るヒトへの疾患については現在のところ知られていないが，マダニ類は多くの疾患の媒介者になり得るので[15]，マダニ刺症と確認された患者については十分な経過観察を必要とする。

マダニ刺症の発生時期は，その地域に生息するマダニ類の活動時期と密接に関係している。九州地方に多く分布するフタトゲチマダニおよびキチマダニ成虫の活動期は，前者が春~夏，後者が秋~冬である[16]。また，タカサゴキララマダニは沖縄県においては年間を通して活動している[2]。今回のキチマダニ属 *Haemaphysalis* 2種による咬着例もそれぞれの活動期に合致していた。

マダニに咬着された際，虫体を無理に引き抜くと，折れた口下片が皮内に残り異物性肉芽腫や膿瘍などを形成することがある[7]。そこで，虫体の除去には口下片穿入部位に局所麻酔薬を注入し，虫体を損傷せずに除去する方法が推奨されている[17]。本例では皮膚片を含めて虫体を除去している。

まとめ

福岡県で見出されたマダニ刺症の2症例について報告した。1列目は福岡県小郡市在住の女児(6歳)で，左前額部に咬着していた虫体はフタトゲチマダニ *Haemaphysalis longicornis* の雌成虫と同定した。2列目は福岡市早良区在住の女性(75歳)で，背中から採取された虫体はキチマダニ *H. flava* の雌成虫と同定した。

稿を終えるに当たり，資料を提供くださった関係各位に厚くお礼を申し上げます。なお，本文の要旨は第28回および第32回九州臨床検査学会において発表した。

参考文献

1) 山口 昇：マダニ刺症－種の多彩と症例の増加．最新医学　44: 903~908，1989.
2) 山口 昇：わが国のマダニ類による人体刺症の実態．衛生動物　45: 215，1994.
3) 宮崎道明，角田浩之，山口 昇：マダニ刺症の4例．臨床検査　37: 95~97，1993.
4) 米田豊，福間利英，伊藤敏雄，小田原修一，吉田 宏：マダニの人体刺咬11例．衛生動物 43: 263~266，1992.
5) 青木千春：大分県下でのマダニによる人体刺咬5例．衛生動物　44: 405~406，1993.
6) 岡 恵子，大滝倫子，加納六郎，山口 昇：マダニ刺咬症の5例．衛生動物　37: 174，1986.
7) 初鹿了，吉田 宏，岩永 襄：南サハリン(旧樺太)林野でのマダニ咬着例．日本医事新報 No.3553: 48~52，1992.
8) 初鹿了，高上真一，岩永 襄：スリランカ(旧セイロン島)でのマダニ咬着例．日本医事新報 No.3699: 49~53，1995.
9) 金井塚生世，石井則久，中島弘，黒沢伝枝：北米産キララマダニ属の一種 *Amblyomma americanum* による刺咬症の本邦第1例．皮膚臨床 37: 376~377，1995.
10) 山口昇，中島康雄，大友弘士，西山明雄：マダニの人体咬着輸入例．衛生動物　47: 195，1996.
11) Miyamoto, K., & Kato, H.: A *Dermacentor* tick imported on a traveller to Nepal. Med. Entomol. Zool. 47: 287~289, 1996.
12) Miyamoto, K., Nakao, M., Sato, N., & Mori, M.:Isolation of Lyme diseases spirochetes from an ixdid tick in Hokkaido, Japan. Acta Trop. 49: 65~68, 1991.
13) 川端眞人：ライム病．検査と技術　20: 194~199，1992.
14) 藤田博己，大竹秀雄，大原嘗一郎：宮城県川渡農場でのへい死ノウサギ寄生マダニからの野兎病菌分離例と放牧牛の血清抗体調査．衛生動物　36: 75~77，1992.
15) 高田伸弘：病原ダニ類図譜．金芳堂．1990.
16) Kakuda, H., Shiraishi, S. & Uchida, T. A.:Seasonal fluctuations of populations and effects of temperatures on developement and growth in the tick, *Haemaphysalis flava*. J. of Fac. Agr. Kyushu Univ. 35: 17~26, 1990.
17) 馬原文彦：マダニの摘出方法．皮膚臨床　32: 1918~1919，1990.